あぜ道
稲作技術情報
Ｎｏ．３５６（令和５年 No. ３）
令和５年５月１２日
▼発　行▼
山本地域振興局農林部農業振興普及課

適期移植と水管理の徹底で苗の早期活着を！

１　気象と作業状況

○４月は天気が周期的に変化し、気温の寒暖差が大きくなりました。

○本年の播種盛期は４月18日（平年並）でした。18日以降好天が続き、日照時間が長くなったことから、ハウス内の温度が上がりやすく、苗の生育が平年より早くなりました。

○５月11日に仙台管区気象台が発表した、向こう１ヶ月の平均気温は、期間の前半に気温がかなり高くなる予報になっています。田植えまでの適正な苗の管理をお願いします。

２　田植え作業とその後の管理

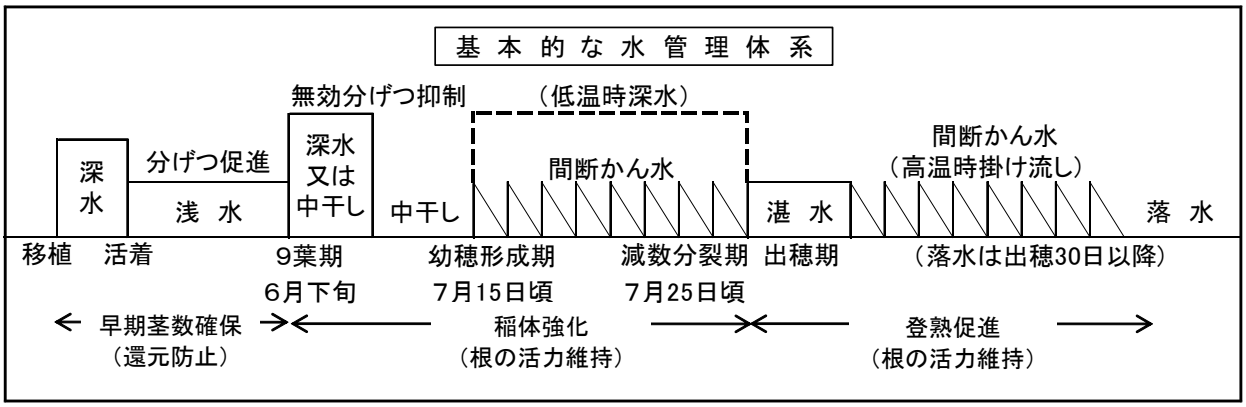
①田植えから活着まで

○田植え作業は、日平均気温14℃以上（中苗）、できれば最高気温20℃以上の温暖な日に行います。最高気温15℃以下の低温時や強風時は見合わせましょう。

○田植えの時期は、安全出穂期内に出穂するように決めます。好適出穂期は、出穂後40日間の積算気温で880℃の得られる時期となります。

○山本地域において、日平均気温が14℃以上になる時期と出穂後の積算気温を勘案すると、平年値では５月15日～25日頃が田植えの適期であるため、作業が極端に遅れないよう注意してください。

○植え付け本数は４本/株程度とし、３cm以上の深植えにならないようにします。



○苗の活着には４～５日かかり、気温・水温が高いほど早くなります。田植え直後は苗を守るため、水深４cm程度の湛水状態を保ち、保温に努めましょう。

②分げつを促進させる水管理

○高品質・良食味米の生産には、強勢分げつの確保が重要です。

○分げつは、日平均水温23～25℃、日気温較差が大きい場合に発生が促進されます。

○活着後は、「早朝かん水・日中止水」を基本に、気温が15℃以上の場合は浅水管理としましょう。また、気温が15℃以下の寒い日は深水管理としましょう。

③雑草防除

雑草の多発は、収量の低下を招くばかりではなく、斑点米カメムシ類による斑点米の多発にも繋がります。主要加害種のアカスジカスミカメは、イネ科雑草やカヤツリグサ科雑草の穂に飛来して産卵し、増殖します。

○草種と雑草量に応じた薬剤の選択と適切な使用により、効果的な雑草防除を行いましょう。

○除草効果を高めるため、一発処理除草剤を単用する場合は代かき日から10日後までを目安に使用します。雑草が残った場合は、草種に応じて中・後期剤を適切に散布します。

○除草剤散布時の水深は、粒剤では３～５cm、フロアブル剤やジャンボ剤、豆つぶ剤等では５～７cmとし、薬剤が拡散しやすいようにします。

○**除草剤散布後７日間は止水とし、排水路への落水やかけ流しはしません。**田面が露出すると効果が低下するため、水が少なくなってきたらゆっくりとかん水します。

○水田周辺の水系など環境に配慮し、移植前の初期剤の使用は避けてください。やむを得ず移植前に使用する場合は、農薬のラベル等に記載の使用方法を遵守してください。

３　いもち病防除

本田の葉いもち発生を防ぐことで、穂いもちの被害を未然に防ぐことができます。以下の点に注意して葉いもちの発生を予防してください。

○育苗期間中に葉いもちが確認されたハウスの苗は移植しません。

○本田葉いもち防除は、箱施用剤、側条施用剤、水面施用剤のいずれかで必ず実施します（育苗期いもち防除剤として育苗ハウスで使用した、ベンレート水和剤やビームゾルは、本田まで防除効果は持続しません）。

○**ほ場に放置された補植用の余り苗は、葉いもちの強力な伝染源になるため**、補植終了後は水田の泥の中に埋めるなどして、**完全に処分**してください。

○乾燥状態で越冬した稲わら・籾殻は、葉いもちの伝染源となるので、ほ場周辺に放置しないでください。なお、敷きわらを使用している野菜ほ場の周辺では、葉いもちの早期多発に注意してください。

農薬安全使用の徹底を　！

○　農薬のラベルには必ず目を通し、農薬基準を遵守しましょう

○　農薬の散布時には、周辺作物に飛散（ドリフト）しないよう十分な注意が必要です。

○　農薬散布後は散布器具の洗浄を確実に行いましょう。

○　病害虫の発生状況を把握し、必要最小限の農薬使用に努めましょう。

○　防除履歴は必ず作成しましょう。

不明な点がある場合は、山本地域振興局農林部農業振興普及課（℡52-1241）までご連絡ください。